

## 努力事項解説 その6 (中学校音楽)

生徒が思いや意図をもって音楽表現を追究したり、  
じっくりと音楽の美しさを味わう学習過程を組織したりして、  
そのプロセスにおいて生徒一人一人のよい点や成長の状況などを  
積極的に評価し、指導に生かしましょう。

### 生徒が思いや意図をもって音楽表現を追究したり、とは

生徒一人一人が、やらされて音楽活動を行うのではなく、  
「自分はこのように歌いたい。」とか、  
「この曲はこのように歌えばこの曲のよさが表現できる。だから自分はこのように歌いたい。」  
というような、生徒自身の考えで音楽活動をさせましょうということです。

音楽は本来、自発的に取り組む芸術です。やりなさいと言われて仕方なく歌わされたり、演奏させられたりするものではありません。以下のような手立てを用いて生徒に思いや意図をもたせて音楽活動を行わせましょう。

- 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る活動を積極的に行いましょう。

これから取り組もうとする楽曲に出会わせるときに、その曲のよさや特質がどういうところにあるのか、楽曲を繰り返し聴かせたり、楽譜を見せたりして、考えさせ、話し合わせ、気付かせましょう。(これが音楽科における思考の場面のひとつです。)それぞれの楽曲には、それぞれのよさや特質があります。それが何なのか、そして、なぜそのような特質や魅力があるのか、音楽を形づくっている要素と関連させて話し合わせて、楽曲の特質やよさに気付かせましょう。

- 知覚、感受で気付き、感じたことを表現に生かすようにしましょう。

上記の知覚、感受が行われ、音楽の要素と曲のよさや特質の関係に気付き、感じ取ったら、それを表現に生かすようにさせましょう。

例えば、賛美歌等で和声の響きやその動きがその楽曲のよさや特質の中心になっていることを知覚、感受できたら、それを生かして表現するためにはどうすればいいか、考えさせましょう。(これが音楽科における思考、判断の場面のひとつです。)生徒が自分なりに考えて、例えば、

「和声をきれいに響かせて歌うことができれば、この曲のよさが表現できると思う。」  
だから

「和声をきれいに響かせるには地声ではだめだから、よく響く発声にしたい。」

「和声をきれいに響かせるにはバランスが大切だから、低音をしっかり出したい。」

「それぞれのパートが正しい音程で歌うことも大切だから他のパートを聴きながら歌いたい。」

などの思いを持たせるよう指導し、それを言葉や文章で表現させましょう。(これが音楽科における、思考、判断、表現の中の表現の場面です。音楽を表現することではありません。詳しくは第2観点を解説した10月18日にアップしたページを参照してください。)

これらの例は全て、楽曲を聴いて知覚、感受したことを表現に生かそうという思いや意図をもっている状況の例です。

○ 自分の思いや意図どおりに表現できたかどうか、生徒自身に判断させる機会を設定しましょう。

自分で「こう歌いたい。」「このように演奏したい。」という思いや意図をもち、その実現を目指して音楽活動をしたら、実際にそれができたかどうかを、生徒自身に判断させる機会をつくりましょう。教師がそれを判断することは当然必要ですが、その前に、生徒がそれを判断することで、意図どおりできていれば満足感、成就感を味わうことができるでしょうし、できていなければ、フィードバックして繰り返し練習したり、教師が支援してできるようにするする場面です。

また、生徒が満足しても教師が満足できる段階まで達していないと判断されれば、教師が指導をしていきましょう。

じっくりと音楽の美しさを味わう学習過程を組織したりして、とは

鑑賞の授業では、特に長い曲の場合など、楽曲の一部分を繰り返し聴かせることがよく行われます。ねらいに応じて、こういった「分析的な聴取」をさせることももちろん大切ですが、楽曲を「全体的に聴取」させ、じっくりと音楽に浸らせることも必要です。ねらいに応じて、両者をバランスよく組み合わせて聴かせるようにしましょう。

なお、音楽の特質やよさを教師が言葉で説明してしまう場合がありますが、これは意味のないことです。例えば、「この楽曲は、弦楽合奏のさわやかな音色と、歯切れのよいリズムで、春の様子を表そうとしているのですよ。」と説明しているこの内容こそ、生徒が実際にその音楽を聴いて、聴き取り、感じ取るべき内容であり、学習のねらいそのものです。教師はこれを言葉で説明してしまうのではなく、音楽を聴かせて、音から聴き取らせ、感じ取らせるように様々な手立てを行っていくことが鑑賞の授業です。この点、十分配慮しましょう。

ただ、その音楽が成立した当時の、時代的な背景等を音楽を聴くことと関連させて説明することは大切なことです。

生徒一人一人のよい点や成長の状況などを積極的に評価し、指導に生かしましょう。とは

音楽活動をしていく中で、生徒一人一人のよい点や成長の状況进行评估することはとても大切です。音楽という教科の特性として、音楽を創り上げていく活動を、グループまたはパートで、さらには学級全体で行うことがあります。その過程で、その生徒なりのよさや個性を發揮して協同する喜びを味わいながら音楽活動を進めることができている場合など、それを評価し称賛しましょう。そうすることで、ねらいにせまるための活動がさらに活性化することにもなります。

題材や本時のねらいを達成できたかどうかは、「目標に準拠した評価の規準」で評価しますが、その一方で、生徒一人一人ののびや成長を積極的に評価し指導に生かすことが大切です。

例えば、「この生徒は、前の題材では音楽表現の創意工夫が C と判断せざるを得ない状況だったけれど、今回の題材では、もう少しで B と評価できるようになるまでのびた（成長した）。」といった場合、教師は、「よくがんばったね。」と努力を認め励ますとともに、指導方法を工夫して、この題材が終わるまでにはこの生徒を B と評価できるように指導していくことが大切だという意識を持ちましょう。



今回は、小学校の努力事項『児童が思いや意図をもって音楽表現したり、じっくりと音楽のよさや面白さを味わう学習過程を組織し、そのプロセスにおいて児童一人一人のよい点や成長の状況などを積極的に評価し、指導に生かしましょう。』について考えてみます。

11月22日（金）頃アップする予定です。